

電気エネルギーで走る環境に優しい車、エコカーの競走大会「ワールド・エコノ・ムーブ(WEM)」。全国を転戦し、理工系の大学や自動車関連機器メーカーのチームが多数出場する。その中で豊橋創造大(愛知県豊橋市)の文系学生のサークルが毎年好成績を残している。

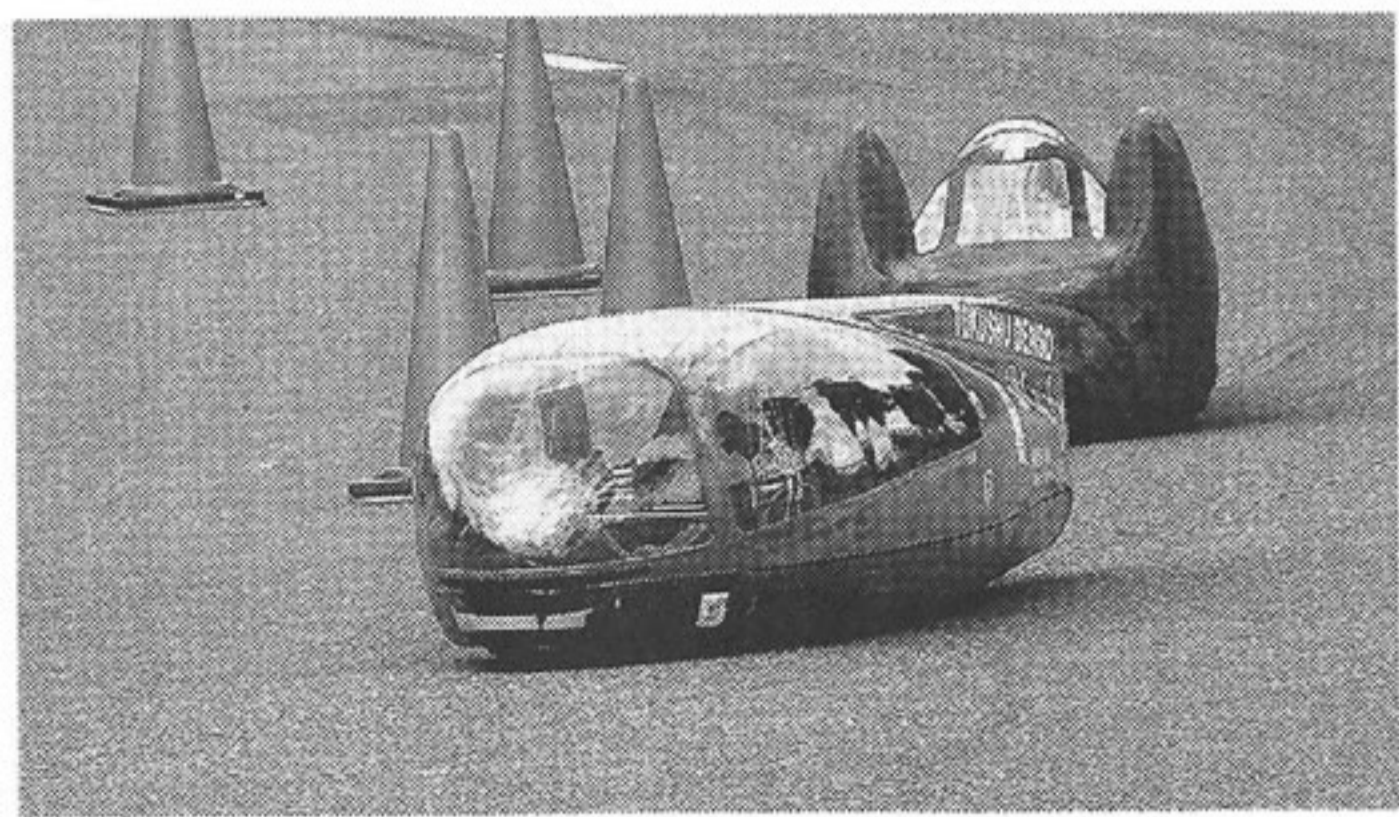
(豊橋総局・日下部弘太)

午後七時、仕事を終えた大学のOB・OGらが現れる。T-Works Eco Projectの活動が始まる。OBを含めメンバー約十人は自慢の愛車「Blucky(ビーラッキー)」の整備に取りかかる。半分以上は女性。ドライバーやペンを手に、和気あいあいと作業が進む。

エコカーは、乗用車のヘッドライトの片側分の電気しか使わない。車体は炭素繊維など硬くて軽い素材を用い、ガソリンに換算すると一辺で数千キロ走る。スピードは時速四十キロを超える。

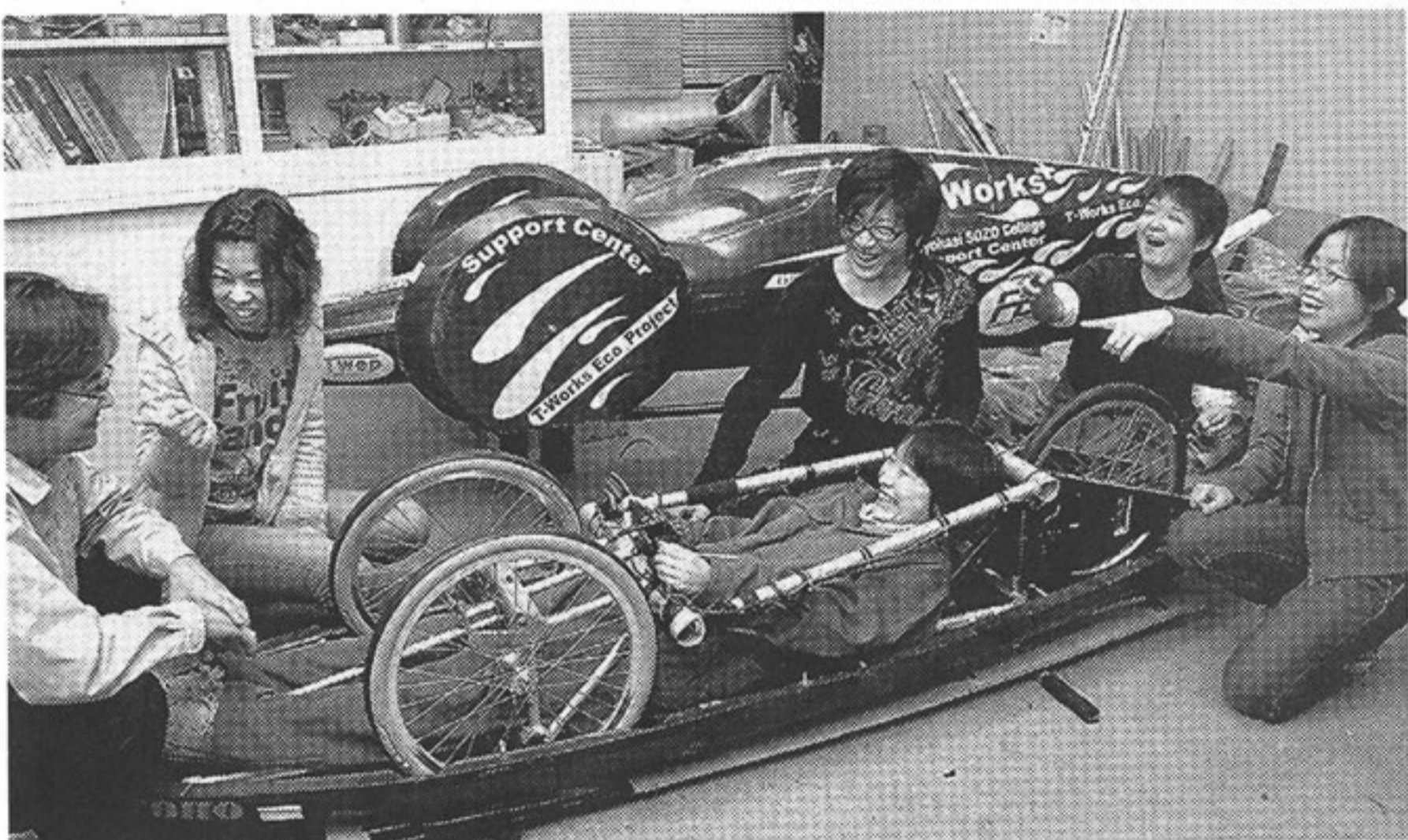
昨年製作したBluckyは長さ三メートル、重さわずか二十四キログラム。空気抵抗が少ない、流線形の美しいフォルムだ。運転者はあお向けの姿勢で乗り、コースに合わせ電気信号を送ってモーターの回転数を

文系だってモノづくりに夢中



力走するBlucky＝千葉県成田市で

全国を転戦し好成績



エコカーを囲み談笑するメンバーら
＝豊橋市の豊橋創造大で

OBら協力し整備

変え、速度を調節する。

しまう。

T-Worksはそもそもパソコンに関する学生相談室「サポートセンター」の運営に携わる学生たちが立ち上げたサークル。エコカーに目が向いたきっかけは一九九九年、豊橋市内で開かれたエコカー大会を手伝ったこと。興味を持ったメンバーが「Eco Project」として取り組み始めた。

借り物の二輪車から始め、ほどなく三輪に移行。これまでに三台製作した。「みんながワイワイガヤガヤ言いながら作るのが楽しい」と佐藤榮里子代表(四年)。メンバーのほとんどは「スパナって何？」という段階からの出発。それが、いつしか「モノづくり」に目覚め、OBになって毎週通うほど夢中になって

年も。その中でT-Worksは一般部門で〇四年九位、〇五年五位、〇六年三位、〇七年六位と上位に食い込み続けている。

幸い、アイシン・エイ・ダブリュ田原工場(愛知県田原市)など、WEMに出場する強豪チームのメンバーが近くで働いており、快く教えてくれる。同社チームの中村昭彦さん(四七)は「彼女たちが理工系の大学のチームをこてんぱんにするのが楽しくて」。しばしば直接訪れてはアドバイスしている。もちろん、中村さんらの温かい協力はメンバーの熱心さを知っているからこそだ。

地元企業チームも 温かいアドバイス

〇五年に創造大大学院を修了した兵藤愛さん(三三)は、T-Worksに入ってから未来が変わった。「文系だから、理系だから、という固定観念がイヤだった」。卒業後は設計会社へ。現在は機械設計のエンジニアだ。一方、病院の事務職を目指して入学した佐藤代表。「卒業してもモノづくりに携わっていたい」と、同じ事務系の仕事でも製造業を選んだ。

二〇〇二年にスタートしたWEMに、T-Worksは初回からほぼ毎レース出場している。現在、大会は四一十月の間に八戦を行い、一定の時間でどれだけ長い距離を走れるかを競う。一戦ごとにコースが異なり、規則も変わる。次のレースに備えて電気の配線やギアのかみ合わせを調整するため、シーズン中は毎日三、四時間は作業に打ち込む。現地でも、練習走行で故障が見つかれば徹夜の修理。「今年の本番直前にモーターが焼けちゃって。大急ぎで取り換え、何とか走ったのが一番の思い出かな」

WEMには、大学の研究室など、専門家を含め、時には二百チーム以上が出場する